

「希望」の原理と生涯発達： E. ブロツホと E. H. エリクソンをもとに

鈴木 忠

本稿の目的は、E. ブロツホの希望の哲学を参考にしながら、生涯発達の新しい考え方を模索することである。その意味で、これまで別の論考（鈴木，2009；鈴木・飯牟礼，2008）において、晩年性（lateness）や「何もでもなくいられる力（negative capability）」に注目して議論をしてきたことと同様の問題関心にもとづいている。

【1】 希望の原理

1-1 希望とは何か

私たちは希望ということばをいろいろな場面で用いる。本稿で議論する「希望」は、日常的な意味と重なってはいるが、哲学上の概念として独特の力点がおかれている。はじめに、ブロツホが希望という語をどのような概念として用いたのかを、彼の論述にそって見ていこう。

そもそもブロツホを捕えたのは、人間はどんなに絶望しても希望をもつことをやめない事実である。むしろ絶望の中でこそ希望の力が発揮されるように見える。人間は「まだない」ものになぜかくもひきつけられるのか。なぜ現実のものとなっていないことについて考えることをやめないのか。そこには、世界を完結したものとして捉えない世界観があるとブロツホはいう。主著のひとつ『希望の原理』から引いてみよう。

もし世界が完結しており、固定し完成された事実で満たされているとしたら、いかなるものも願望に応じて作り変えることはできないだろう。世界の中に存在するのはそのような事実ではなく、ただ単に過程のみ、すなわち既成のものが完全に勝利を得てはいない動的な関係のみである。(ブロッホ, 1982, 第1巻, p.264)

引用の最初の文は、ここで議論する「希望」の背景をなす「現実」についての見方が示されている。現実世界は「完結」しない「過程」であるからこそ、希望の存在意味があるとされる。つまり希望とは世界を「作り変える」ことへの願望である。現実世界は「既成のものが完全に勝利を得てはいない動的な関係のみである」からこそ、希望によって現実が作り変えられる可能性があるのである。現実の中で希望することは、今現在目の前にある世界の中に、こう変わってほしい、変えられるのではないかという可能性を見ることである。上の文章に続いて、ブロッホは「可能的なるもの」について論じる。

現実とは過程である。過程は多岐に枝分かれして、現在と、解決されていない過去と、なかならず可能な未来との間を媒介する。すべての現実的なものは、その過程の最前線で可能的なものへ移行している。可能的なものとは、すべてようやく部分的に条件づけられたもの、まだ百パーセント完全に決定されてはいないものである。この場合、むろん、単に認識上つまり客観的に可能なものと、実在的に可能なもの——それがここでの関連で重要な唯一のものであるのだが——とは、区別しなければならない。(同, p.264)

「すべての現実的なものは、その過程の最前線で可能的なものへ移行し

ている」とあるように、現実には可能的なものをその一部（「最前線」）にもっている。現実世界は、既におこったものだけでなく、まだ現実化していない無数の可能性から構成されているのである。

「可能的なもの」が、「単に認識上つまり客観的に可能なもの」と「実在的に可能なもの」の2つに大きく分けられている。後者が「重要な唯一のもの」であるとのことだが、さらに続く文章を見てみよう。

客観的に可能 (objektiv möglich) であるのは、その出現が既存条件の単なる部分的認識にもとづいて科学的に予期し得るもの、あるいは少なくとも否定しえないもののすべてである。それに対して実在的に可能 (real möglich) であるのは、その条件が客体そのものの領域ではまだ百パーセント完全には集まっていないもののすべてである。その条件がようやく熟しつつあるにしても、またとりわけ、新しい現実の出現のための新しい条件が——たとえ既存の条件に媒介されてにせよ——生じつつあるにしても。動かされ、自ら変わり、可変的である存在、弁証法的・物質的なものとして現れる存在は、この未完結の生成可能性、つまりまだ閉じていないという性格を、その根底にもその地平にももっている。
(同, p.264)

ブロッホの希望の哲学は現実についてのものであり、それは「可能であること」の吟味である。『希望の原理』に関連した論集 (Daniel & Moylan, 1997) を参考にして、ここで検討されている「可能性」を整理してみる。

- (1) 個人的・主観的なもの。上の引用にはないが、個人が頭の中でつくりあげた主観的な可能性である。単なる個人的願望である。往々にして現実の単純な否定であり、糸の切れた凧のような、とりとめない空想や妄想の類である。「現実はこうなるべきだ」というヴィジョンをもたず、

行動をおこさせる動因とならない。したがって現実世界に相渉ることがなく、文字どおり「非現実的」なものに終始する。

(2) 客観的に可能なもの。現実を分析することで客観的に——すなわち「科学的に予期し得る」可能性である。しかしそれ自体不活性 (inert) な単なるデータにすぎない。人がそれを使って、現実に対してコミットするためのヴィジョンをもたない限り、現実の一部（最前線）にはならない。

(3) 実在的に可能なもの。弁証法的に可能なもの。その可能性の実現へ向けて、人に実際の行為を促すもの、それに向かって人が生きる糧にし得るようなものである。程度の差こそあれ、日々の生活様式や判断のしかたなどを含め、人の行動を制約するものである。E.H.エリクソンがガンディーの伝記研究を通じて指摘したように（エリクソン，1974）、ガンディーがインド古来の非暴力の教えとして民衆に示したものが、イギリス支配を脱するという実在的な可能性の例であろう。少なくとも民衆は、インドが独立できる客観的可能性が高いと考えてガンディーについていったわけではない。

別の例をあげよう。ユダヤ人であるプロッホの希望哲学には、ユダヤ民族の歴史が反映していると言われる。ユダヤ人は2000年以上前にパレスチナの地を追われて各地に離散し、長く流浪した歴史をもつ。「約束の地」に帰って祖国を再建することが何世代にもわたる民族の悲願——すなわち希望であった。すぐに実現する見込みはほとんどないけれど、いつか来るその日のために日々の生活を律し、周囲に同化することを拒んできた。彼らにとって約束の地に祖国を建設することが「実在的な可能性」であろう。インド独立の場合と同様、ユダヤの地に国家を建設できる「客観的可能性」が高いからユダヤ人は希望をもち続けたわけではない。客観的な実現可能性とは別の次元で、約束の地への帰還を現実の一部とする生活を続けてき

たのである。

ガンディーの説く非暴力の教えやユダヤ民族にとってのパレスチナへの帰還は、当の人々にとって目の前の現実とは矛盾し対立している。そうであるからこそ「実在的な可能性」は、所与の現実への批判的視点をうみ（「これが本来あるべき姿なのか」）、現状との間に緊張関係をもたらす。矛盾の存在を問いかけ続けることによって事態が動く。そのような意味で、実在的な可能性は弁証法的可能性である。

1-2 完結した世界との対決

ブロッホの希望の哲学は、希望を主題にしつつ、現実とは何かを問う。希望は確かに未来に関係するが、何よりも現在の問題なのである。上述のように、ブロッホによれば、現実未完結していないもの（unfinishedness）であり、創発的（emergent）である。世界はつねに「なりつつある（becoming）」過程であり、未来は「まだ～ない（not yet）」という可能性の領野にある（Levy, 1997）。それは単に、未来が不確定であるということではない。

物事を「完結」させる思考枠組のもとで考えると、現実世界を変えようとすることは希望ではなく「目標」になる。目標は、それに適した手段を選び、達成することができるものである。つまり問題解決の一種として完結を目指すのである。それに対して、ブロッホの希望論が前提とする未完結の世界においては、希望＝「まだ～ない」は、どこまでいっても「まだ～ない」なのである。問題解決の枠組みで成就し完結してしまう目標は、過程としての「終わらない」世界の希望とは別のものである。

過程としての希望の世界観は、物事を完結させる世界観としばしば対立する。ブロッホの哲学をもとに希望学を主唱している宮崎広和が、南太平洋のフィジー諸島で行った文化人類学のフィールドワーク（宮崎, 2009）

を見てみよう。

フィジー諸島のスヴァヴォウという村に住む先住民系フィジー人たちは、19世紀末以来失われた祖先の土地に対する補償金を政府に請求してきた。政府はこの問題をとりあげることを一貫して拒んでいたが、スヴァヴォウの人たちは請願をやめない。宮崎によれば、彼らの請願の活動は、彼ら自身についての知識、自分たちが誰であるかという「真理」を確認しようとする希望を表すものである。先住民系フィジー人たちにとって、本当のこと（dina；ダイナ）は、効果的であること（mana；マナ）であり、その逆も成り立つ。つまりスヴァヴォウの人たちにとって、喪失した土地に対する対価として多額の補償金を手にする権利があると信じるからこそそれは真実（ダイナ）なのであり、同時に、補償金を手にすることによって、彼ら自身の知識が真理にもとづいていることが示されると考えるのである。

フィジー政府の側からすると、公文書によってこの問題は確定し決着している。文書という「動かぬ」証拠があるのであるから、スヴァヴォウの人たちの訴えは勝ち目のないものに見える。しかしスヴァヴォウの人たちにしてみると、自分たちの出自やアイデンティティーが公文書などの外的なものによって規定されることは一種の疎外であり、「本当のこと」が明らかにされなくてはならない。そこで彼らは「確定」されているかに見える知識を流動化すべく、政府に対して問いかけ、何らかの応答を引き出そうとする。つまり公文書などはっきり形になっている外的なものに自己知識の根拠を求めるのではなく、問いかけ一応答といった相互行為を行うことで、希望を形に表す。問いかけに対してはっきりした答が返ってくることが彼らの目的のではなく、「公文書が証拠だ」という既存の枠組みに対して、問いかけをするという行為で挑戦し続けることに意味がある。政府側は証拠の文書を示すことで、スヴァヴォウの人たちの訴えが無効であることを誰の目にも明らかな形で証明したと考えるが、彼らはその証明方

法の枠組みそのものを認めない。たとえて言えば、裁判で敗訴が確定しているのに異議申し立てをやめないようなものである。そうすることで、完結したかに見える世界を動かそうとするのである。

1-3 ユートピア

上で見たように、実在的な可能性としての希望は、単なる情緒的なものではなく、ガンディーにしてもユダヤ民族にしても、「本来あるべきもの」を具現化した物語やイメージをもっていた。先住民系フィジー人にとっては、自分たちがいかにその土地と結びついているかということについて、祖先から語り伝えられてきた一種の神話をもっている。ブロッホのことは言えば、希望はユートピア的な機能として意識され知識化される。

ユートピア的な機能の内容は、空想（ファンタジー）の表象の中に表れる。ただしそれは、過去にあった知覚を呼びさます追憶の表象とは異なる。現在あるものを、未来のよりよいあり方の可能性へと先取りしながら推し進めるものである。

したがってこのように規定されるユートピア的な機能をもった空想が単なる妄想と区別される所以は、前者のみが、期待し得る種類の未だ在らざる存在（Noch-Nicht-Sein）をもっているということである。つまり、その空想は空虚な可能性の中を戯れ、さまようのではなく、実在的な可能性を心理的に先取りするのである。（ブロッホ、1982、第1巻、p.198）

ガンディーのインド独立にしても、ユダヤ民族の父祖の土地への帰還にしても、あるいはフィジーの「マナ」にしても、「本来～であるはずもの」すなわち「真実」が具体的なヴィジョンとしてあり、しかもそれが所与の現実と矛盾し対立している。希望と結びついたユートピアは、「本来こう

なるべき」という形で、現実世界へのコミットメント（行動指針やヴィジョン）として具現化したものである。

ブロッホの『希望の原理』はユートピアの概念を復興したと言われる（Levitas, 1997）。彼はユートピアについて考察するにあたり、白昼夢、おとぎ話、神話、旅行者の話、錬金術、理想社会の記述、さらには音楽や建築など、多岐にわたる文化的諸形態を取り上げて検討を行った。それらを総合して考えると、ユートピアとは「よりよい生活への夢」を具現化したものと見ることができる。それは現実を越えるものであり、現実を変換するものとしての未来に向かう。可能である複数の未来が現実の一部を構成するのであり、現実の内部ではあるがその縁（edge）にあるというその位置は、ユートピアが超越的であることを意味する（Levitas, 1997）。

ブロッホは次のように述べている。

また、ユートピア的な機能は残存している唯一超越的な機能であり、残るべき価値のある唯一の機能であって、それはいわば超越性のない超越的な機能である。その拠り所と相関概念は過程であり、これは、その最も内在的な「何」という内容をまだ外に現わしておらず、依然として進行しているものである。したがって、過程はそれ自身希望の中に存在し、未だ成らざるもの（Noch-Nicht-Gewordenen）の客体的な予感の中に未だよく成らざるものとして存在する（ブロッホ, 1982, 第1巻, p.200）。

先に『希望の原理』から、「すべての現実的なものは、その過程の最前線で可能的なものへ移行している」ということばを引いた。ユートピア実現への希望を平易な言葉で言うなら、「できそうで、できない。かつ、できなさそうで、できる」と表現できるだろう。それは「できるかどうかかわからない」こととは全く違うものであることを確認しておく。「わからな

い」ものは現実世界の一部を構成するとは言えないからである。また、「できそうで、できない」あるいは「できなさそうで、できる」のどちらか一方だけというわけでもない。「できない」と決まっているのなら希望をあきらめるしかないわけだし、「できる」のであれば、しかるべき目標を定め適切な手段をとって実現に向かえばよい。「できそうで、できない。かつ、できなさそうで、できる」という相矛盾したものがセットになって現実世界の「縁」を構成していることを、ブロッホは「超越性のない超越」と呼んだのである。

【2】 子どもの願いごととファンタジー：『ウォーリーの物語』より

2-1 願いごとの力

ここまではブロッホのいう希望の「原理」に焦点化して議論をしてきた。例としてあげたものは、民族レベルで文化的伝統として共有されたものであった。以下では、子どもの発達における希望を考えてみたい。

完結しない世界観にもとづいた希望とユートピアは、実は願いごととファンタジーとして、子どもの世界にごくふつうに見られる。むしろ、世界を完結した物事の連なり、集積として捉えることの方が、一定の発達を必要とするのではないかとさえ考えられる。ここではV.G.ペイリーによる幼稚園での実践記録『ウォーリーの物語』（ペイリー，1994）をもとにする。

彼女の教育実践は1980年代にアメリカのシカゴでなされ、幼児期の子どもどうしの会話をもとにした一連の著作は大きな支持を集めた。その中の『ウォーリーの物語』は、ウォーリーという想像力豊かな子ども（豊か過ぎる上に行動がともなうのでクラスをひっかきまわし教師をてこずらせる）を中心にした、5歳児クラスのエピソードが記録されている。ほぼすべてのエピソードにファンタジーが登場し、それらは子どもたちの願いごと(wishes)と結びついている。ペイリーによれば、子どもたちが願いごと

をするのは、それによって現実をコントロールできると感じるからである。

あまりに簡単に手に入ったものには、疑いの目が向けられる。願いごとなど必要ないとはのめかされたように感じるからである。願いごとが力を失ったら、子どもは自分にもコントロールの力があるという夢を断念して他人の気まぐれや身勝手な思いに支配されなければならないだろう。(p.129)

2-2 現実の非完結性：「もしかしてもしかしたら」

願いごとはファンタジーとして語られる。一見するといかにも子どもらしい、他愛ないものだが、プロッホが述べた「完結していない」世界観に通じている。『ウォーリーの物語』から例をあげよう。(以下の引用部分は平仮名表記を漢字にするなど一部改変した。)

ある日の昼ごはんの時、ウォーリーが言った。「大きくなったら、ぼく、お母さんライオンになるんだ。」

「お母さんライオン？お母さんライオンになることができるの？」私が聞いた。

「なれるよ。図書室に行けば何でもわかるもの。魔法だって。8歳になったら、魔法が習えるよ。そうやって、なるんだ。」

「どうしてお母さんライオンになりたいの？」

「だって、ライオンの赤ちゃんを産んで、お母さんの仕事をしたいもの。お母さんライオンはうちにて、赤ちゃんの面倒を見てればいいんだよ。お父さんライオンは外で働いて、走り回ってないといけないんだ。」

ディーナがその会話を聞いていた。「人間は動物になれないわ。」

「そうだね」とウォーリー。

「考えを変えたの、ウォーリー？」と私が聞いた。

「ディーナの言ったことに、そうだねって言っただけだよ。だけど、ほくは魔法を使うんだもん。」

「ああ、そうなの。そこんどこ、聞いてなかったわ。」ディーナが身を乗り出してきた。「魔法を使えばできるかもしれないね。もしかして、もしかしたらだけど。とってもむずかしいことだけど。」(pp.12-13)

この後、別の子たちも次々に会話に加わるが、みなパターンは同じである。人間がライオンになれっこない。しかし魔法を使うのなら、「もしかして、もしかしたらだけど」可能かもしれない。——これは就学前の、幼児ならではの発想かもしれない。もう少し大きな子たちではどうだろう。以下は、ペイリーが小学校2年生のクラスに出かけて行って尋ねたときの会話である。

教師「幼稚園に行っている男の子が、クラスの友だちに、大きくなったらお母さんライオンになるつもりだって言ったの。その子は魔法の訓練をすれば、それができると言ったのよ。」

セイリア「魔法は、人間をなりたいうようにしてくれるものじゃないわ。」

教師「魔法には使い道が全然ないの？」

セイリア「魔法の術 (tricks) があるわ。魔法の術なら、習えるのよ。」

ハリー「えーと、変装することはできるし、ライオンの声のテープレコーダーをそばに置いとけば、本物のライオンだと思われるよ。」

セイリア「でも、それはやっぱり、魔法の術でしょ。」

スチュアート「お姉ちゃんがくれた、手品のセットと同じだね。ボールは本当に消えるわけじゃないんだ。ずっとコップの中にあるんだよ。」

ハリー「本物の魔法っていったら、超能力だけよ。それだけは、本当に

本物なんだから。」

アラン「魔術師のやり方を覚えたら、ちゃんとうまくできるようになるまで、練習し続けないといけないんだよ。」

セイリア「でも、それだって、ただの魔法の術でしょ、アラン。」

アラン「魔法の術じゃないものだって、あるよ、セイリア。」

教師「何年も練習したとして、動物になれるようになる？」

アラン「なれない。別のものになら、なれるかもしれないけど。」

スチュアート「友だちがこんなことをしたんだ。魔法じゃないけど、魔法みたいなことだったんだよ。前にその子、お父さんがある物をくれるって、固く信じたら、お父さんが本当に、そのとおりの物をくれたんだって。」

教師「願いごとのようなものなの？」

スチュアート「違う。友だちはただ、お父さんがそれをくれるって、心の中で信じていたんだよ。」

ジョン「先生のクラスの子のことだけど。その子がなりたいと思っているだけで、本当にはなれないんだ。ファンタジーなんだよ。」

ハリー「科学者が一生懸命研究して、人間をライオンに変える公式を作り出すかもしれないよ。」

セイリア「私が聞いたことのある魔法は、奇跡だけよ。」

教師「それは、スチュアートの友だちが何かを固く信じたようなこと？」

セイリア「ちょっと違うわ。何かお願いしていることがあって、それは起こるはずがないってわかっていたのに、突然、そのとおりのことが起こるっていうようなことなの。」

サリー「私は、いつか薬ができるかもしれないと思うわ。そんなことがあるはずないんだけど、人間をライオンに変える薬のことよ。でも、そうなるかもしれない。」

ハリー「その子をライオンにはできないかもしれないけど、大勢の博士が一生懸命やって、ライオンそっくりに見えるようにはできるかもしれないよ。」

サリー「ライオンみたいに見えるってということで、ライオンみたいに話せるってことじゃないでしょ。吠えたり、そういう声を出したりすることじゃないわ。でも、それも、魔法じゃないわね。科学に関係あることだもの。」(pp.281-283)

ペイリーは次のようにコメントしている。

2年生の言う博士や科学者は、窓の外に立っていて普通の硬貨を魔法の硬貨に変えるという、あの幼稚園児の考える魔術師に似ていなくもない。ハリーやその友だちは、ファンタジーや奇跡や薬について、安全な距離を保ちながら分析的に語ってはいた。だが、外見の変化によってある種の現実が生まれる場合があること、願う気持ちが物事の実現を確約してくれるかもしれないことが、可能性としてほのめかされていたし、とりわけ、超能力については、実現可能であると思われていた。(p.283)

こういった考え方はもっと大人になればすっかり「卒業」というなら、寂しい墓場を真夜中に一人で歩くことを考えてみよう。魂や霊などあるはずがないと頭で信じていたとしても、薄気味悪くて落ち着かないとしたら、その人にとって霊にまつわる世界は非完結のもの——「もしかして、もしかしたら…」という余地があるのである。

2-3 「本当のこと」

『ウォーリーの物語』で印象的なのは、子どもたちが話すファンタジーは、しばしば「本当のこと」を追求することの表れだという点である。ただし、それは大人から見ると必ずしも「本当」（事実）ではない。子どもたちは、あることが信じられるならばそれは「本当のこと」なのだ、と考えているようである。

ある日、ペイリーが子どもたちに読んで聞かせた物語に、石をスープに入れてぐつぐつ煮るという話がでてきた。物語の中の石が小さくなって溶けたことを疑う子どもはおらず、自分たちが実際に石を鍋で煮てみたとしても溶けるはずだということで意見が一致した。そこでペイリーは石をお湯に入れて1時間煮てから外に出した。「すごく小さくなった。ずいぶん溶けちゃった」という子がほとんどなので、煮る前と後で石の重さを秤で測ってみることにした。当然重さ（秤の目盛り）は変わらなかったが、子どもたちは「（目盛りが）2のままだ。でも小さくなってる」「すごく小さくなってる」と口々に言い、ペイリーが「石の重さは変わっていないでしょ。さっきが2ポンドでいまも2ポンド。ということは、石の重さが減っていないということよ」と言うのに対して、「秤じゃ、石は見られないんだよ」と言う。子どもたちは石は煮れば溶けると信じており、秤を使った計測による証明に説得されないのである。

これに似た、さらに印象的なエピソードがある。

別のある日、子どもたちは遊びで使っている絨毯の大きさを測っていた。子どもたちは1辺が子ども何人分の背丈になるかで考えていた。長い方の辺は4人が寝てちょうど端に達し、短い方の辺は3人で端に達した。翌日、測るのに参加した子のひとりが欠席したので別の子が代わりに入って測ったところ、背が低いために絨毯の端まで届かなかった。それを見たペイリーが「人の背の高さを心配しないで絨毯の長さを測る方法はないの?」と言

い、巻き尺を導入する。巻き尺で長さを測ってみせた翌日、欠席していた子が出てくる。ウォーリーは「これで絨毯を本当に測れる」という。ペイリーが「私たちは定規を使って、絨毯を本当に測らなかったの？」と尋ねる。するとウォーリーは「だって、定規って、本当の本物とは違うでしょ」という。それからしばらくして、子どもたちが誕生日のその日に急に背が伸びると信じていることを知ったペイリーは、次のように書く。

その疑問「誕生日に急に背が伸びるか」についてどんなに長く話し合いをしても、結論は変わらなかった。まるで子どもたちが共謀して不利な証拠を退け、共同の信念を守ろうとしているようだった。ふつうの教師だったら、そこで考えるかもしれない。巻き尺を導入してみたらどうだろうか？ 人間の背が一日で急に伸びるはずがないことくらい、たやすく証明できる。誕生日前に子どもの背を測っておき、誕生日がきたら、私の見方を結論づけてやればいいと。ところが困ったことに、子どもたちは、定規を正統な (authentic) ものとして認めていない。子どもたちに私たちの「事実」を反復するよう迫ることはできる——そうした子どもたちを是とすることもできる——だが、前提を信じていない子どもに、無理やり概念をのみこませることなどできはしない。(p.166)

認知発達の根本をついたコメントである。ただ、子どもたちは定規を正統なものとは全く認めていないわけではないし、大人の前提を全く信じていないわけではない。子どもの中に、大人とは違った世界観が確固として存在しているというわけではない。たとえば、子どもたちは歯の妖精（抜けた歯を枕の下に入れて寝ると贈り物をくれる）の存在を信じていて、実際に町で見かけたという子が必ず出てくるが、一方でこんなエピソードも紹介されている。アケミが植木鉢に1ペニー硬貨を植えるつもりだというと、

子どもたちは「何にも出てこない」という。アケミはそこからペニー硬貨の芽が出たり硬貨が増えると考えたのである。「魔法のペニーかもしれないわ」と言うと、全員が「そんなもの、ないよ！」ウォーリーが「おとぎばなしから、思いついたんだよね。アケミ、ふざけてるんだよね？」アケミ「ほんとに、魔法だってば。」すると「みんなはどっと笑いだし、アケミもつられて笑った。」硬貨から芽が出ることは多くの子にとってイメージしづらく、「もしかしたら…」という可能性にもう一步訴えなかったのである。

2-4 「みんなに信じてもらえたならそれが本当になる」

「本当のこと」は、願いごとをすることでいつかなうと子どもたちは信じているが、同時に、いつも受け身ではない。自分たちで積極的に「本当のこと」をつくり出すことがある。遊びや劇の場面である。ペイリーはある日、ロールプレイの場面を設定して、自分の過ちを正直に認めることを子どもたちに教えようとした。

教師「お母さんがこれから買い物に行くことにして、子どもに言うの。

<テーブルの上の小さなガラスの動物にさわらないでね。とってもこわれやすいから。>その子は約束したのに、お母さんが出かけるとすぐに動物にさわってうっかり落として、こわしてしまったのよ。お母さんに本当のことを言うこともできるし、風で倒れたということもできるわ。みんなで意見を出し合った後で、劇でその子の役をする人に、どちらにするか決めてもらいましょう。」

ウォーリー「最初に、ぼくがやっていい？」

教師「いいわよ。ウォーリーに男の子の役、エレンにお母さんの役をやってもらいましょう。」

エレン「すぐこわれてしまうから、動物たちにさわっちゃだめよ。」

ウォーリー「わかったよ、お母さん。約束する。」(ウォーリーは動物を持ちあげて、落とす真似をした。)

教師「エレン、戻っていらっしやい。ガラスの動物が壊れているのを見て、どう思ったか、男の子に言うのよ。」

エレン「悲しいわ。どうしてこんなことをしたの？」

教師「まだ答えないでね、ウォーリー。どうすればいいか、他の人の意見を聞いてみましょう。」

エディ「本当のことを言って。風だって言っても、お母さんは信じてくれないもん。」

アンディ「本当のことを言って。大統領になれるかもしれないから。」

ローズ「本当のことを言わないと、ベッドにいれられちゃうわ。」

キム「ぶるぶるふるえてたら、お母さんに、嘘だってわかっちゃう。」

アケミ「お母さんが怒るから、本当のことを言わないと、だめよ。お母さんは、本当のことを言いなさいって、言ってるもの。嘘って、怖いことよ。お父さんもお母さんも、風のせいじゃないって、思ってるわ。」

アール「お母さんにあやしまれちゃうから、ほんとのことを言って。」

エディ「ぼく、気が変わった。嘘を言った方がいいよ。だって、ジャックみたいに、お母さんにひどくぶたれたら、どうするの。」

ターニャ「エディに賛成。本当のことを言ったら、だめよ。男の子は約束したんだもの。お母さんにわかりっこないわ。」

ウォーリー「どうするか、ぼく、もう決めた。他の人の考え、もう聞かなくて、いいよ。」

教師「いいわよ。エレン、また戻ってちょうだい。」

エレン「どうしてこんなことをしたの？」

ウォーリー「お母さん、ぼくがやったんじゃないよ。風で倒れちゃったんだよ。」

エレン「まあ。」

教師「男の子の言うことを信じたの？」

エレン「そうよ。」

教師「でも、ウォーリーは私が話した物語の役をやっていて、私の物語では、男の子が動物を落として、こわしてしまったのよ。」

エレン「でも、このお話は、そうじゃないの。」(pp.201-203)

ペイリーは次のようにコメントしている。

風による偶然の出来事のように見えることは、信じてもらえたなら、そちらが本当になる。本当に起こったことというつもりになろうと子どもたちが言って、そのつもりになりさえすれば、それがそのまま起こったことになるかもしれないのだ。(p.203)

子どもたちは「本当のこと」に対して主体的に納得しようとしているし、自分たちで「本当のこと」をつくり出そうとしているのである。

ここまであげてきた子どもたちの事例は、幼児期の子どもの認知能力が限られているために現実と空想を混同していることの表れではないかと考えられるかもしれない。しかし、子どもは現実と空想をきちんと区別できているのかと問うとすると、それはここで議論してきた希望の次元とは別の、ウォーリーが「本当の本物」とみなさなかつた枠組みからの問いになる。現実と空想を区別しようとすることは、「もしかして、もしかしたら」という希望のもつ超越的側面を排除してしまうことになるからである。(なお佐伯(1995)の第1章を参照のこと。)ここではむしろ、そのような

側面を射程に入れている E.H.エリクソンの発達論を見ていくことで、希望が発達の原因に通じることを示そうと思う。

【3】 エリクソンの生涯発達論と希望

エリクソンの発達論によれば、乳幼児期から青年期にかけての発達とは、母性的養育者への信頼感を支えに「私であること」の感覚を確立し、遊びを通して未来への予期を体験し、やがて個性をもった一個の人間になることである。

エリクソンの第3段階は「遊戯期」と命名されている。(下の表を参照。)

エリクソンのエピジェネティック図表

老年期 Ⅷ								統合 対 絶望, 嫌悪 英知
成人期 Ⅵ							生殖性 対 停滞 世話	
前成人期 Ⅴ						親密 対 孤立 愛		
青年期 Ⅳ					同一性 対 同一性混乱 忠誠			
学童期 Ⅲ				勤勉性 対 劣等感 適格				
遊戯期 Ⅱ			自主性 対 罪悪感 目的					
幼児期初期 Ⅰ		自律性 対 恥, 疑惑 意志						
乳児期 Ⅰ	基本的信頼 対 基本的不信 希望							
	1	2	3	4	5	6	7	8

…幼い個人の中で成熟しつつある遊びは、彼を無数の想像上の同一化や活動という小領域における劇化（dramatization）に向かって解放する。遊戯期はさらに、明確に定義された勤労役割を伴う学童期が到来する前に、そして様々な同一性の可能性を実験する青年期が到来する前に、「出現（occurs）」することにも注意しておきたい。（エリクソン・エリクソン，2001，p.104）

このように漸成的過程（epigenesis）を見てくると、遊びと仕事を対立的なものと考えることができないことがはっきりする。最初期の遊びの中にも真剣な仕事の初期形態が存在し、また、遊びの成熟した要素は、事実、仕事に対する真剣さを妨げるどころか、むしろそれを強化するのである。（同，p.64）

希望論によれば、幼児期の遊びは自己超越として捉えることができる。ごっこ遊びやふり遊びで典型的に見られるように、たとえば怪獣やお母さんに「なって」遊ぶ子どもにとって、それらになっている私は、私であって私でない自分である。上のウォーリーたちのことばでいえば、「もしかして、もしかしたら」全く私でないものになれるかもしれないというのが、子どもたちのもつ「自分」であり現実である。エリクソンは、このようにさまざまなものに「なってみる」試みを広く遊戯性（playfulness）と捉える。そして青年期にアイデンティティーを形成するための準備段階を含め、「全ての〔発達〕段階におけるひとつの本質的要素」（p.104）と位置づける。

成人期の発達についてエリクソンは次のような興味深い表現をしている。

…自らがそうあらしめたものに徐々に成っていきながら、人は最終的に

自分がこれまでであったものに成っていくのである。(gradually becoming what one has caused to be, one eventually will be what one has been.)」
(同, p.108)

「自らがそうあらしめたものに徐々に成っていく」とは、「私でありながら、まだ私でない」状態を表しているだろう。そして「人は最終的に自分がこれまでであったものに成っていく」とは、「新たに実現された私は、これまでも私であった」ということであろう。つまり、発達とは「まだない」私をたぐりよせていく過程として捉えることができる。希望のもつ超越的な側面を共有していると読むことができるのである。(なお西平 (1993) の第7章を参照のこと。)

しかしエリクソン自身による各発達段階の説明は、青年期を境に現実世界の制約が色濃くなっていく。成人以降は、職業にいそしみ、家族を形成し、老年期に至って「要約する感覚 (a sense of summary)」をもってライフサイクルを「完結」させるという標準的発達を想定しているように読めるのである。既存のコミュニティーを、新しい時代の要請に応えつつ、次世代にとって「平均的に期待できる環境」として再生・維持することを使命とし、自分の人生を収束させる点に力点が置かれていると思われる。

しかし成人期の愛と世話になると極めて危機的な中年期の要素が現れてくる。つまり、運命的にあるいは自分自身ですでに非可逆的に選択した諸条件によって、これからできる選択の幅が狭まるという兆候である。この時期になると、諸条件、境遇、提携集団 (associations) が、その個人の「一回限りの人生における一回限りの」現実成ってくる。成人の世話は、かくして、自分が非可逆的に選択したものであるいは運命によって選択せざるをえなかったものを、一生涯世話をし続ける方法に、他者

と共同で専念するものになる。その歴史的時点の技術的条件の範囲内でそれを大切に世話し育むためである。(同, pp.107-108)

希望論をくぐった視点から見ると、上に引用したエリクソンのことばは、成人期以降が急に記述的になってしまって物足りないと感じられないだろうか。鈴木・飯牟礼(2008)は、発達の不均質性に照らして、自分の人生を総括し意味づけることを通して老年者として成熟し老年者〈らしく〉なることが期待されるような発達観を批判し、それを相対化するオルタナティブな概念として「晩年性」に注目した。既に成った自分のスタイルを壊しつつ、新たなスタイルを模索しつづける「晩年性」は、本稿でとりあげた「希望」に通じる生き方である。現実には、人はただ一つの人生しか生きることができない。しかし祖先の土地の権利回復を願い続けて生涯を終えるスヴァヴォウの人々のように、「まだ…ない」可能性を抱き続けるという生き方が存在する。希望としての発達は「終わらない」のである。

引用文献

- ブロッホ, E. 1982 希望の原理 (山下肇他訳). 白水社. (原著は Bloch, E. 1959 *Das Prinzip Hoffnung*. Suhrkamp Verlag.)
- Daniel, J.O., & Moylan, T. (Eds.) 1997 *Not yet: Reconsidering Ernst Bloch*. London: Verso.
- エリクソン, E.H. 1974 ガンディーの真理: 戦闘的非暴力の起源. (星野美賀子訳). みすず書房. (原著は Erikson, E.H. 1969 *Gandhi's truth: On the origins of militant nonviolence*. New York: Norton.)
- エリクソン, E.H.・エリクソン, J.M. 2001 ライフサイクル、その完結 (増補版). (村瀬孝雄・近藤邦夫訳). みすず書房. (原著は Erikson, E.H. & Erikson, J.M. 1997 *The life-cycles completed: A review (Expanded edition)*. New York: Norton)
- Levitas, R. 1997 Educated hope: Ernst Bloch on abstract and concrete utopia. In J.O.Daniel & T. Moylan (Eds.), *Not yet: Reconsidering Ernst Bloch*. London:

Verso.

Levy, Z. 1997 Utopia and reality in the philosophy of Ernst Bloch. In J.O.Daniel & T. Moylan (Eds.), *Not yet: Reconsidering Ernst Bloch*. London: Verso.

宮崎広和. 2009 希望という方法. 以文社.

西平直. 1993 エリクソンの人間学. 東京大学出版会.

ペイリー, V.G. 1994 ウォーリーの物語：幼稚園の会話（卜部千恵子訳）. 世織書房. (原著はPaley, V.G. 1981 *Wally's stories: Conversations in the kindergarten*. Harvard University Press.)

佐伯胖. 1995 「学ぶ」ということの意味. 岩波書店.

鈴木忠. 2009 自己を越える／現実を越える：アイデンティティー概念再考. 生涯発達心理学研究（白百合女子大学生涯発達研究教育センター紀要）, No.1, 19-29.

鈴木忠・飯牟礼悦子. 2008 諦観と晩年性：生涯発達心理学の新しい概念として. 白百合女子大学研究紀要第44号, 101-127.